

戦前戦後の文芸批評をけん引した評論家、小林秀雄の太平洋戦争との向き合い方を示す貴重な座談会記録が見つかった。小林は戦争とは距離を置いていたとみられていたが、この資料は国策への協力をめぐる小林の発言を収録している。資料の概要を紹介し、発見者である鈴木貞美国際日本文化研究センター教授に解説してもらおう。

小林秀雄、戦時中の言論に新資料

見つかったのは、一九四三年(昭和十八年)七月に満洲国(の首都、新京(現長春))で開かれた座談会「小林秀雄氏を囲む」の記事。同国で発行された唯一の日本語総合雑誌「藝文」の同年八月号に、十一頁にわたって掲載されている。鈴木教授は中国の研究者と「藝文」の復刻を監修する中でこの記事に行き当たった。



小林秀雄氏(提供)「藝文」の編集長が参加。小林秀雄氏(提供)「藝文」の編集長が参加。小林秀雄氏(提供)「藝文」の編集長が参加。

対する文学者の態度、古典文学を研究する意義などが話題に上っている。従来、戦中の小林は新聞や雑誌上での発言を控え古典評論に打ち込んだとされてきた。しかし記事は小林の時間についての発言を伝えており、国策への協力を肯定するととれる部分もある。

雑誌「藝文」の復刻版は、ゆまに書房から刊行中。座談会記事を含む四三年発行分は六月中にも発売される。



「満洲国」で発行された唯一の日本語総合雑誌「藝文」に掲載された「小林秀雄氏を囲む」の記事(1943年8月号)

報国と執筆「二正面作戦」



鈴木貞美教授

小林秀雄の足跡を追いつづけた日本文学研究者の古田照生氏が生前、宙を眺めて嘆息したのを思いだす。「満洲に何か残していると思っただが、氏の最後の仕事になった最新版「小林秀雄全集」の年譜も、この「満洲国」での座談会にはふれていない。座談会の冒頭、小林は自分の仕事に打ち込む姿勢を明らかにしている。戦時中のその文学者の姿勢を尋ねられても、「理念は無用、黙って書くだけだ」とくりかえす。

「戦争、新鮮な題材」
 実際、彼は一九四一年秋、ジャーナリズムの表舞台から身を引き、古典評論に没頭していた。だが、それを文学の筆に代えてもって悪い時代をやりすぎず「内部への沈潜」と見るのは一面的にすぎない。谷崎潤一郎「細雪」が四三年三月で連載禁止になった話になる。「弾圧、弾圧と騒いでもしかたない、与えられた不自由を利用するだけだ」。

「ペン部隊」に入って自分の仕事をすればよい。なにしろ「戦争は新鮮で強烈な題材」とと曲切れよい言葉が出る。小林はきっぱりと戦争にも

喜んでいたのだ。「平家物語」など中世文学に関心を抱いたのも、動乱期の日本人の姿を見守るためだった。小林はまた、その前日「満洲国」の中国人作家を代表する古丁と話しあったこと、自分の「民族を愛する立場でやればよい」と意見が一致したことも語っている。古丁との対話に触れたこのくだりは、小林が新京にやって来た真の目的を暗示している。

当時の国策が何だったのかか問われるべきだろう。「満洲国」では「民族協和の旗の下、大東亜共栄圏の模範たれ」が、国策雑誌「藝文」の合言葉にもなっていた。たが他方、「共栄圏」ではなく「日本」に属していた台湾や朝鮮の作家たちは、四〇年前後から母語で書くべきであることと、その母語の「国策意識」を問われていたのではないのか。

座談会のおと、小林は北京に寄って東京に帰り、八月二十六日、文学者の異業相織、日本文学報国会が主催した第二回「大東亜文学者大会」二日目の演壇に立つ。「でたらめな理念」の飛びかう現状を激しく非難し、作家はあくまで実作で提携しようとする。三日目には、先の古丁が互いに翻訳に力を入れようという提案。汪精衛の南京政府や北京から参加した作家も同じ趣旨の発言をし、翻訳機関の創設が決議される。

文学報国会は「大東亜共栄圏」の大義に賭けていた。その多文化主義に、古丁らは同調し、民族の言語と誇りを守ろうとした。小林が盟友、河上徹太郎らと相前後して大陸に渡ったのは、この大会の根回しのためだった。報国会には全面協力、自分の仕事は任事。「でたらめな理念」つまり神がかったイデオロギーの季節に直面して、小林は二正面作戦をとっていたのだ。

「共栄圏」の理不尽
 ただ、これら文芸家たちの姿勢を「協力か、抵抗か」の単純な二分法で割り切った評価しても意味がない。まずは